北武蔵における初期横穴式石室導入期の様相

増　田　逸　朗

1　問題の所在

横穴式石室は、追葬可能な構造を備え多埋葬を目的とし、一般的には古墳時代後期の埋葬主体部として登場してくる。この石室構造から、家父長の死を契機に古墳が構築され、その世帯ないし家族の埋葬施設とされており、家族墓的墓制と理解されている。そして古墳時代後期は、この男系的血縁関係の醸成による有力家父長的家族の出現をもって、歴史的に評価されている（註１）。

また横穴式石室は、以前の竪穴構造の粘土槨や木棺直葬と異なり、部屋的な広い空間を有し、ここに器、それも食料を供えたものさえ見られ、明らかに他界観の変化が読み取れる。器の埋葬施設内への副葬は、古くから大陸や朝鮮半島で見られた現象であり、ここからの影響であることは論をまたない。これからすれば、横穴式石室は、その集団の男系的血縁組成の成熟に加え、新たな他界観を昇華した者が採用したことになる。

殊、集団の成熟度は、列島では一様とは考えられず、また、横穴式石室採用以前に渡来系の人々が数多く存在し、これにかかる遺物も各地で知られている。これよりすれば、地域における横穴式石室の採用は一律ではないはずである。これに反し、一様に出現する地や特定集団に見られた場合は、擬制的同族関係を含め、より政治的証しとして理解しなければならないだろう。

さて、系譜に関する資料としては、記紀の皇統譜は勿論のこと、少なからず氏族の系譜についての記録もある。しかし、ここで扱う北武蔵に深く関連するものとしては、何と言っても稲荷山古墳の金錯銘鉄剣をおいて他に見当らない（註２）。

周知のように辛亥銘鉄剣は、オオヒコからオワケの臣に繋る八代の男系譜をうたいあげており、さらに、それが雄略大王の時期（辛亥年）とし、５世紀後半の男系世襲の存在を物語っている。

しかし、この系譜については幾つかの疑問も提示されている。まず一代のオオヒコから五代のタサキワケまでは尊称があり、六代がハテヒ、七代がカサヒヨでこれが見当たらない。これをもってオワケの臣の系譜を、彼をもって三代までを確実視して、以前を他氏族との共有系譜とする意見も有力である。この系譜に関し、埼玉古墳群周辺の古墳をみた場合、稲荷山古墳以前の古墳は確認されていない。しいて挙げれば、Ｂ種ヨコハケ埴輪をもつ、全長69mのとやま古墳（註３）以外になく、これとて稲荷山古墳と同時期か、せいぜい一世代古く考えられる程度である。一方、埼玉政権成立の基盤を、比企地域まで拡大し理解するのも魅力的考えである。これによれば、三代前の首長墓を追うことは可能である。しかし、この地に４～５世紀代の前方後円墳が存在するとはいえ、八代約200年間の首長墓系譜を比定することは、現状では不可能である。

かつて述べたように、私は、オワケの臣が阿部氏系統にかかる人物として認めたにしても、彼自身が主体部の位置や構造から、稲荷山古墳の礫槨の被葬者とする立場は採っていない（註４）。

いずれにしても、辛亥銘鉄剣の八代にわたる系譜の一部は、５世紀後半における首長層の男系血縁組成による世襲を意味するものであり、この評価は変わらない。

さて、前述するように、男系的血縁関係の醸成による男系出自の認識の強化が、氏姓制度成立へと進展させ、すでにその萌芽が銘文中には見られたわけであるが、やがて広く男系血縁意識の高揚が進み、結果、家族認識の変質をきたし、その葬制として家族墓（横穴式石室）の出現を見るという図式が成り立ちそうである。

ここで重要なことは、武蔵国造の累代の墓とされる首長墓と、有力家父長的家族の群集墳とで、この現象が同時に進行したかということである。どうもそうではないらしいが、現在の学界では明解な答えは用意されていないのが現状である。

埼玉古墳群における横穴式石室の出現は、現在のところ将軍山古墳（註５）からである。

将軍山古墳は、整備にかかる調査で墳丘長90ｍで二重周堀をなし、中堤西側に造出しが確認されている。主体部は右片袖の横穴式石室で、副葬品には蛇行状鉄器や銅鋺、石製皿、馬具等の豊富な遺物があることで、つとに知られている。最近では、この副葬品の中に馬冑が確認され、半島との関係が取りざたされている。本墳の築造時期は、後円部西側に取り付く造出し付近から須恵器瑞３点が見られ、これがＭＴ85～ＴＫ43に比定され、６世紀第３四半期の年代が与えられている。この年代は、副葬品の馬冑や蛇行状鉄器を含め大きく矛盾することなく、大方の容認を得ている。

他に、横穴式石室を主体部とするものに、墳丘長79ｍで二重周堀を有する、中の山古墳（註６）が挙げられる。この古墳は、須恵質の埴輪形壺を廻らし、埴輪消滅期の様相を呈し、６世紀末～７世紀初頭の年代が与えられている。そして、古墳名を古く「かろうとやま」と呼んだことからも横穴式石室の存在が予測される。

さて、問題となるのは、埼玉古墳群の首長系譜とされる、全長109ｍの鉄砲山古墳（註７）である。この古墳は、整備にかかる調査で、稲荷山古墳や二子山古墳（註８）と同様の多条凸帯の円筒埴輪が出土しており、その年代を６世紀中葉としている。後に述べることになるが、この時期には群馬県の前方後円墳や埼玉県でも児玉郡の古墳では既に横穴式石室を採用している。

鉄砲山古墳の主体部に調査が及んでいない今日、横穴式石室の有無について論及できないが、現地表の後円東括れ部にはその形跡はない。一方、この古墳に隣接し、これに近い時期とされる瓦塚古墳（註９）では、横穴式石室が開口する墳丘東側がかなり削平されていたにも拘らず、石材の痕跡は見当たらない。これよりすれば、鉄砲山古墳の主体部は竪穴系の埋葬施設で、今だ横穴式石室を採用していないとの推論も成立しうる。

埼玉古墳群の成立の契機を稲荷山古墳に求め、礫槨の被葬者をオワケの臣とし、彼を阿部氏系統の一族として理解する大方の意見からすれば、この累代の墓とされる古墳群の被葬者は、東国でも極めて畿内との繋りが強かったとしなければならない。既に６世紀前半の中央政権下では、横穴式石室が一般的であったにも拘らず、埼玉古墳群の首長は何故この埋葬施設の採用が遅れたのであろうか、疑問は残る。

このように埼玉古墳群は、辛亥銘鉄剣の被葬者論に止まらず、古墳の群構成および主体部論等、日本古代史に関わる数多くの問題を内抱しており、ここに至れば、ひとり埼玉県のみの次元ではない。こと、文化行政に携わる人達の責任は大きく重い。以下、横穴式石室導入期の北武蔵（児玉・大里・比企・北埼玉郡域）各地の様相に触れ、これら問題の糸口を探ってみたい。

2　北武蔵の様相

［児玉郡］（第１図）　本郡域の古墳は、埼玉県古墳詳細分布調査報告書によるとその数1,380基で、比企郡域に並んで古墳の数は多いが、前方後円墳の出現を見るのは６世紀以降のことである。

一方、集落に関しては、Ｓ字状口縁台付甕の分布域に属し、群馬県との関係が知られ、これは後の鬼高期坏にも同様なことが言える。さらに、世帯の自立を暗示させるカマドが、北関東でいちはやく採用された地域とされ、東国の覇者上毛野政権と深い関わりを持つ地方である。

導入以前の主体部　生野山１４号墳（註10）は径18.0mの円墳。主体部は墳丘中央に位置し、東西に主軸をとる竪穴式石室で、長軸が2.4m、短軸東が0.75m、西が0.6mで東側がやや幅広い。この測定値からすれば東頭位と考えられる。副葬品にはＵ字型鍬先が見られ、墳丘からはＢ種ヨコハケ埴輪と、ＴＫ208に比定される須恵器樽型瓶が出土している。

長沖２７号墳（註11）は径16.0mの円墳。主体部は墳丘中央に位置し、粘土層上に礫を敷き棺床面とし、転石と緑泥片岩で竪穴式石室としている。石室の規模は、長軸2.2m、幅0.45mである。

初期横穴式石室　長沖２８号墳（註12）は径16.5mの円墳。前記の２７号に隣接し、ほぼ同一規模を示すことや、両墳から出土した埴輪の形態変遷等から、６世紀前半に継続して構築された古墳と考えられる。横穴式石室は転石使用の無袖型で、全長は不明である。玄室は長さ2.99m、幅0.99mでここを墳丘の中央に置くのを特徴とする。この両者を見る限り、埋葬主体部を墳丘中央に、さらに、頭位を同様に収めるようとする思考が看取できる。このことは、横穴式石室導入に際し、前代の葬制に強く規制されていた現れであろう。

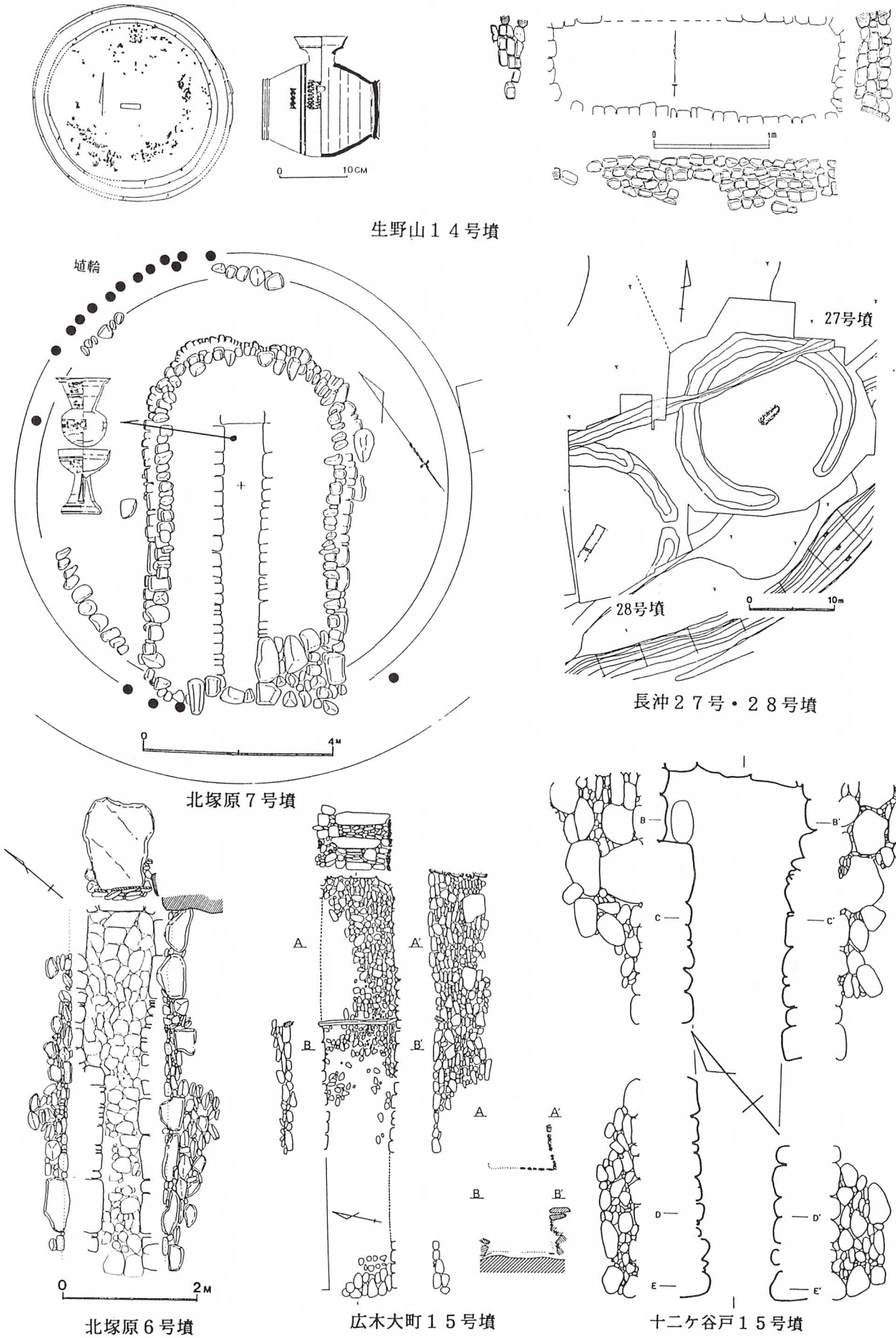
なお、長沖古墳群は、前方後円墳６基を含み、157基からなる武蔵国最大級の古墳群である。

北塚原７号墳（註13）は径15.5mの円墳。主体部は無袖型の偏長なプランを示し、全長5.35m、奥壁幅0.78m、羨道幅0.67mを測る。奥壁左側には、ＭＴ15の須恵器高坏と瓶が供献された様子で出土している。

北塚原６号墳（註14）は７号墳に隣接する径11.0mの円墳。全長4.8mの右片袖型横穴式石室である。玄室長2.3m、奥壁幅0.97mに対し、玄門幅が0.5mと極端に狭い構造である。これら２基の古墳とも、奥壁ではなく、遺体埋葬部としての玄室の中心、ないし、遺体頭部に相当する場所を墳丘中心に置くのを特徴としている。

なお、北塚原古墳群は、青柳古墳群（総数240基）の一支群をなし、21基から構成されている。その内容は、前方後円墳で墳丘長37mの北塚原９号墳と、径11.0～19.0mの円墳からなる。石室は、偏長な無袖型と２基の右片袖型があり、全ての古墳に埴輪が伴う。本支群は、北塚原２号墳(註15)の棺床面下に、５世紀後半から出現する鬼高Ｉ期の坏が見られることと、７号墳の須恵器等から、武蔵国における初期横穴式石室導入期の様相を示す古墳群といえる。

十二ヶ谷戸１５号墳（註16）は墳丘径16.5mの、該期では大型に属する円墳。主体部は右片袖状の「Ｌ字型」石室と考えられる。墳丘に見合って石室規模も大型で、全長7.7m、奥壁幅2.0m、玄門幅が1.5m、羨門幅0.85mを測る。奥壁は通常大型の石材を２～３段使用するが、側壁と同様な河原石の乱石積である。石室の主軸方向はＮ－41°－Ｅを示すが、玄室はこれに直行する。いずれに



生野山１４号墳

北塚原７号墳

長沖２７号・２８号墳

北塚原６号墳

広木大町１５号墳

十二ケ谷戸１５号墳

第１図　児玉郡域の埋葬施設

しろ、本石室の構築原理には、埋葬遺体の方位を東西方向に近づけたいとする、強い意思が働いていたようである。

広木大町１５号墳（註17）は中規模の円墳。主体部は無袖型の偏長なプランを示し、全長5.95m、埋葬部長2.09m、奥壁幅0.96mを測る。主軸方向はＮ－77°－Ｅで、ほぼ東西方向とり、西に開口する横穴式石室である。埴輪等の特徴から６世紀前葉に構築され、本古墳群で最も古い石室形態を示すものとされている。

［大里郡］（第２図）　**導入以前の主体部**　小前田古墳群第１号石棺（註18）は片岩系からなる箱式石棺。主軸はＮ－75°－Ｅ、規模は内法で長さ1.68m、中央幅0.34mで東側がやや幅広い。これよりすれば、東頭位の埋葬形態といえる。頭位については、同古墳群第５号石棺で人骨が検出され、これが証明されている。

第５号石棺（註19）は主軸はＮ－67°－Ｅ。内法も長さ1.86m、幅0.3mと１号石棺に近似し、東側から頭骨と歯が検出されている。周辺には、他に３基の同様な箱式石棺と１基の埴輪棺が調査されている。埴輪棺の円筒は、凸帯が高く、ナナメハケの特徴を示し、６世紀初頭に近い年代が考えられる。これより、周辺の石棺群も同様な時期として大過ないものと思われる。

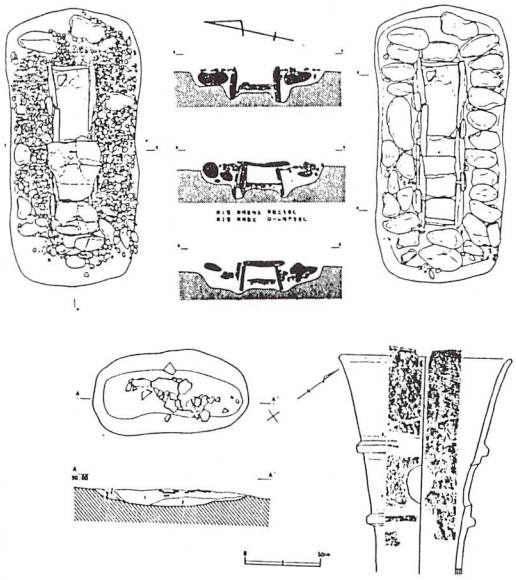
初期横穴式石室　小前田９号墳（註20）は径17.0mの円墳。主体部は無袖型の偏長なプランを示し、主軸はＮ－49°－Ｅで、やや西に開口部を振る。石室は現存長5.8m、梱石前方右側の棺床礫とレベルを同じくして、須恵器ＭＴ15を模倣した土師器瑕４点が検出されている。なお、小前田古墳群は、かつて90基の存在が確認できた大古墳群で、前方後円墳も知られている。大部分は小円墳であり胴張石室も見られ、その盛行期は６世紀中葉から７世紀中葉にかけてと見られる。

黒田４号墳（註21）は径18.0mの円墳。石室は左片袖の偏長な形態を示し、現存長5.6m、玄室は偏長な羨道が梱石で仕切られ、長辺2.2m、右側壁1.2m、左側壁1.1mと東側がやや広い。石積は、奥壁が側壁と同様な乱石積みで構築され、玄室東側に通常の奥壁の大型腰石を二段に積んでいることから、東頭位を考慮に入れた石積み方法と解釈できる。本墳は、副葬品が比較的豊富で、碧玉製管玉、切子玉、ガラス玉、棘箆被鑿箭式鉄鏃、雲珠、鉸具、帯金具、兵庫鎖（鐙靼）、連結轡が見られ、鉄鏃の型式や馬具等からＭＴ15～ＴＫ10頃に比定されている。

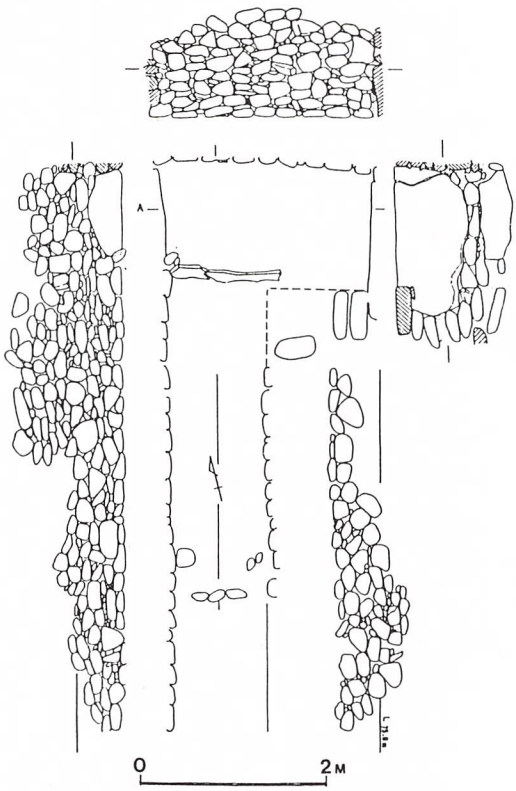
［比企郡］（第２図）　**導入以前の主体部**　諏訪山１号墳（註22）は径20.0mの円墳。主体部には粘土槨が２基存在し、２号槨の主軸はＮ－60°－Ｗで、全長3.44m、幅0.9mを測り、遺物の出土状態から東頭位と見られる。１号槨からは鉄剣、鉄鏃、ガラス玉が、２号槨からは直刀、鉄鏃、楕円形鏡板付轡、辻金具、鉸具、鈴付腕飾にＴＫ47期の須恵器が棺外から出土している。

初期横穴式石室　諏訪山４号墳（註23）は規模不明であるが、６世紀後半の円墳と見られる。石室は凝灰質砂岩の切石の無袖型で、全長4.7m、玄室長3.5m、奥壁幅1.75m、羨道幅1.25mを測り、主軸はＮ－60°－Ｅで、東頭位を示す。

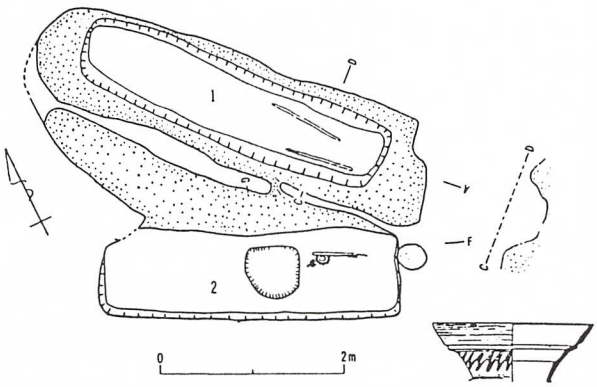
長塚古墳（註24）は全長33.0m、後円部径24.0m、前方部幅12.0mの前方部未発達の前方後円墳。主体部は凝灰質砂岩の切石を使用し、後円部に右片袖型横穴式石室を、前方部に竪穴式石室が見られる。横穴式石室は全長5.7m、玄室長4.0m、玄室幅1.5m、羨道幅0.9mを測る。竪穴式石室は長さ2.3m、幅1.0mである。底部調整の円筒埴輪の存在や墳形等から、６世紀後半でも中葉に近い時



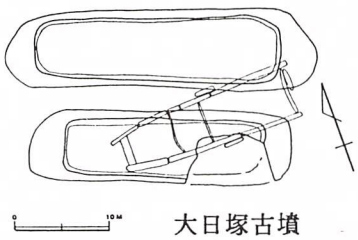
小前田古墳群１号石棺・埴輪棺



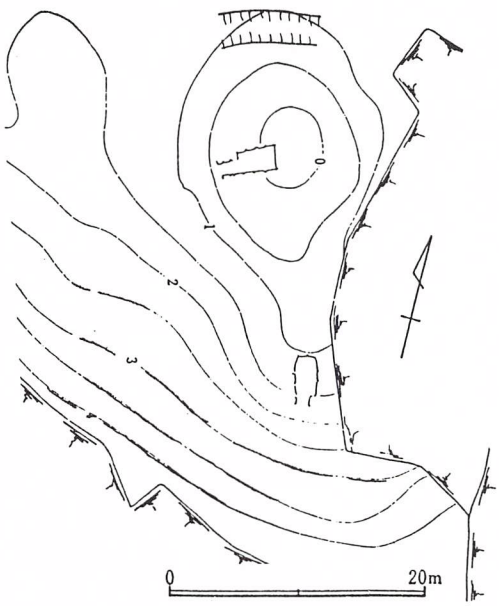
黒田４号墳



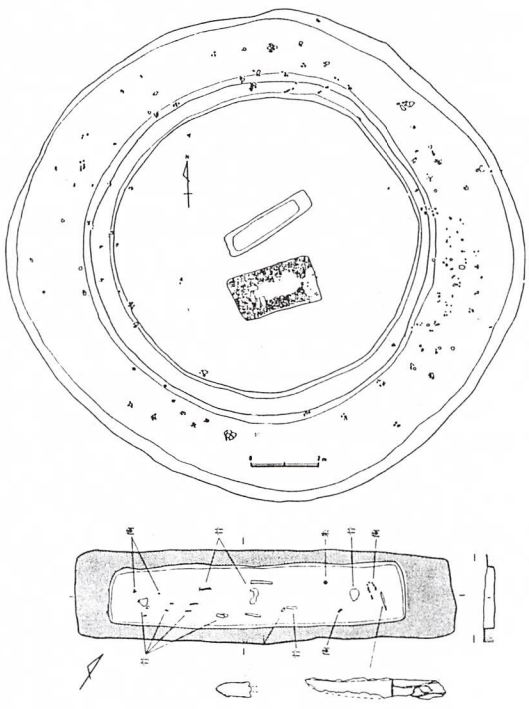
諏訪山１号墳



大日塚古墳



野原古墳



酒巻１０号墳

第２図　大里・比企・北埼玉郡域の埋葬施設

期と推定される。

野原古墳（註25）は全長約40.0mの前方後円墳。墳形は長塚古墳と同様に前方部が未発達で、前方部と後円部に２基の横穴式石室を持つ。当古墳は、踊る埴輪を出土したことで著名である。

後円部の石室はＮ－62°－Ｅで、全長4.6m、奥壁幅2.0m、玄室長3.0m、羨門幅1.1mを測る右片袖型石室。これに対し、前方部は南に開口する左片袖型で、玄室長3.1mを測り、胴張りが見られる。両者とも凝灰質砂岩の切石を使用している。前方部の石室の胴張りから、この石室の築造時期は６世紀末とできようが、後円部の石室はこれより古い形態である。この時期に、前方後円墳の第一義的主体部が、通常と異なり西に開口する事実は注目に値する。

［北埼玉郡］（第２図）　**導入以前の主体部**　酒巻１０号墳（註26）は径9.0mの小型円墳。中央に２基の埋葬施設を持つ。竪穴式石室は主軸をＮ－72°－Ｅとし、東西2.7m、南北1.4mの掘方に小河原石を敷き詰め、石室はやや大型の河原石を側石とし、内法は長さ1.5m、幅0.3m程である。一方の粘土槨？は、中央部に位置し、長さ2.34m、幅0.43mを測る。ここからは鹿角装刀子、鉄鏃、朱が見られ、埴輪等から６世紀前半の年代が与えられている。

大日塚古墳（註27）は径22.0mの円墳。墳丘中央に３基の埋葬施設を持つ。第１次埋葬時は箱式石棺で、主軸はほぼ東西方向をとり、内法は長さ1.8m、幅0.38m、東幅0.55mを測り、東頭位を示している。本主体部の直上に主軸方位Ｎ－70°－Ｗの２基の粘土槨が、並列して検出されている。規模は内法長さ2.05m、西幅0.5m、東幅0.57mで、一方が内法長さ2.55m、西幅0.55m、東幅0.64mで、両者とも東側が幅広い。ここからは、鹿角装刀子、直刀、鉄鏃が見られた。古墳の時期は、周堀から検出された少量のヨコハケ埴輪と、鹿角装刀子等の副葬品から、６世紀初頭とすることができる。

初期横穴式石室　将軍山古墳は全長90.0mの大型前方後円墳。後円部の右片袖型、前方部に木棺直葬の二つの施設を持つ。石室は段築上南面に開口し、奥壁はほぼ後円中心部に置く。規模は玄室長3.2m、幅2.0m、玄門幅1.0mで、羨道は不明であるが、段築面に構築されており、さほど長いものとは考えられない。時代を示す遺物としては、石室内の副葬品があるが、後円部造出しから発見された須恵器瑞４点が、ＭＴ85～ＴＫ43に比定されることから、本墳の構築は６世紀第３四半期とされる。加えて、石室内からもＴＫ209の須恵器から、かなりの追葬幅が考えられ、これを配慮すれば、時期差のある豊富な副葬品の矛盾もここに解決される。

３　考　　察

以上、北武蔵の横穴式石室導入以前の埋葬施設と、各地における初現期の横穴式石室の様相について、主に形態と方位及び時期に重点を置いて概略を述べてみた。しかし、この地域がかつて東山道に属していた歴史性に鑑み、本論に関わる上毛野の状況を加え、以下論及していきたい。

＊導入期以前の様相　主体部の種類には竪穴式石室、箱式石棺、粘土槨、木棺直葬、埴輪棺、木炭槨があるが、後３者については確認例が少ない。

竪穴式石室は、生野山１４号墳に代表されるような、10～20cm程の河原石の乱石積で、長辺２m前後の単体埋葬程度の規模を示し、所謂片岩割石による超大なものではない。石材については、ここが地理的には秩父山系に近く、河原石は勿論のこと必要とあらば、緑泥片岩の割石さえ採集可能

な条件は備えている。同様なものとしては長辺5.2m、短辺2.4mの石室を持つ生野山将軍塚古墳(註28）があり、幅が広く特異な形態を示す。ここからは、格子目タタキの円筒埴輪がみられ、石室形態を含め、たぶんに半島的要素を窺うことのできる古墳である。一方、酒巻１０号墳のように、石室と土坑の間を小河原石で充塡する技法も見られる。

箱式石棺は、組合式のものが前述の生野山将軍塚古墳の墳麓や、大日塚古墳の第１次主体部等がある。石室と同様土坑の間を河原石で充塡するのが、小前田古墳群１号石棺である。

粘土槨は、諏訪山１号墳や大日塚古墳、酒巻１０号墳等に見られるが、諏訪山１号墳を除いて、白色粘土の量が少ないのが一般的である。なお、前山２号墳（註29）においては、粘土槨に偏平な河原石を棺床面に敷き詰めるという特異な形態のものも存在する。

複数の埋葬施設の組み合せには、①竪穴式石室＋箱式石棺、②箱式石棺＋粘土槨、③粘土槨＋木棺直葬が確認できるが、第一義的主体部の形態を特定するまでの資料は揃っていない。しかし、埋葬位置やこれらに掛かる労働量を厚葬思想の現れとすれば、竪穴式石室→粘土槨・箱式石棺→木棺直葬の順で扱われたであろうことは推測に難くない。

主体部の位置は、円丘中心に遺体頭部を置くのではなく、埋葬施設中央をここに設置するようである。生野山１４号墳や長沖２７号墳が好例である。また、複数の埋葬を想定していたかは疑問であるが、大日塚古墳等は最初の箱式石棺を中央に、そして後の粘土槨２基がこれを中心に左右に振り分けられている。酒巻１０号墳のものも同様に円丘中心から左右に位置している。これらの埋葬施設の在り方すれば、墳丘中心部に対する意識が、主体部構築に際して極めて強く働いていたものとみられる。

主体部の方位は、ほぼ東西を示すものが大部分である。加えて、その頭位は、埋葬施設の短辺の幅より東位を想定できるものが多い。これを確実視するものに酒巻１０号墳や小前田古墳群５号石棺がある。副葬品や頭骨・歯から東頭位を証明できる資料である。これら埋葬施設の墳丘中央設置や東頭位志向は、導入期の横穴式石室の在り方に大きな影響を与えることになる。

ここで扱ってきた導入期以前の古墳には、やや時代幅がある。生野山１４号墳は周堀からＴＫ208の樽型瑕とＢ種ヨコハケ埴輪が、諏訪山１号墳の１号槨外からＴＫ47の須恵器と２号槨の副葬品に扁平鏡板付二連式衙轡が、大日塚古墳はＢ種ヨコハケ埴輪が、小前田古墳群１号石棺に隣接する埴輪棺からはナナメハケ円筒が確認されている。また、大日塚古墳と同市内の酒巻１０号墳は鹿角装刀子を副葬している。

これらの年代決定に当っては、須恵器と火山灰ＦＡについて以前に論考したことがある（註30)。ここで概述すると、ＦＡの降下はＴＫ47の後半段階に見られ、この時にはＢ種のヨコハケ埴輪は見られず、ナナメハケ埴輪が確認される。実年代に関する資料、稲荷山古墳については、第３の主体部を想定しており、オワケの臣を礫槨の被葬者と考えない立場から、辛亥年をＴＫ23の範疇でとらえている。よって火山灰ＦＡの降下の時期のＴＫ47の後半段階を、おおよそ500年を想定し、後に触れるＭＴ15の段階を、６世紀第１四半期にかかるものと想定している。

以上よりすれば、ここで扱った竪穴系主体部の時期は、５世紀第３四半期から６世紀第１四半期とすることができる。

＊出現期横穴式石室の構造と特徴　当地の初期横穴式石室の平面形態には無袖型、右片袖型、左片袖型が見られるが、今のところ両袖型が確認されていない。左右片袖型の中には、奥壁に沿って小玄室を設ける所謂「L」字型石室がある。なお、両袖型が出現するのは、石室に胴張りが現れるＴＫ43の時期を待つようである。無袖型石室は北塚原７号墳に代表される。全長5.35m、奥壁幅0.78m、羨道幅0.67mの極めて偏長な形態を示す。この偏長なものは児玉、大里郡域に初期横穴式石室として広く分布し、隣接する群馬県側にも見られる。構築方法は、奥壁を一枚岩か２段積みとし、側壁は河原石の乱石積技法を用いるのが常である。北塚原７号墳の場合、奥壁より3.2mの所に梱石を抜いた痕跡があり、ここまでが玄室としての空間とも考えられる。玄室高は、奥壁の高さから1.0m前後とみられ、天井高の低い特徴を示す。棺床面には後に現れるバランスではなく偏平な比較的大ぶりの河原石を敷き詰め、前二子古墳（註31）のような切石ではないが形態が似ている。しかし、所謂畿内型の石室（註32）とは構造的にまったく異なり、その系譜をそこに追うことはできない。右片袖型に北塚原６号墳がある。側壁は河原石の乱石積で、棺床面も７号墳に共通している。ここで注目したいことは、玄室の大きさが前述する生野山１４号墳とほぼ同一規模であることと、玄門幅が0.50mと極めて狭いことである。この石室は、玄室内で木棺を組み立てて納棺しない限り、追葬不可能な構造である。平面形態こそ横穴的であるが、羨道の機能を十分果たしたか疑問な石室である。「L」字型としては、黒田４号墳がある。奥壁を側壁同様に積み、玄室右側壁を通常の奥壁のような積み方を施し、玄門入り口は梱石で区切っている。後に触れるが、頭位を意識した石室構築方法である。

さて、偏長な無袖型石室を含め、初期横穴式石室の特徴を列記してきたが、この形態的機能はどこにその目的が在るのであろうか。結論を急げば、その意とするところは、玄室を墳丘の中央に設置するためのものと考えられる。ちなみに、北塚原６号墳は頭位置が、また北塚原７号墳は梱石から想定される玄室中央に墳丘の中心が位置する。このことは「L」字型石室の十二ヶ谷戸15号墳、黒田４号墳でも同様な結果を示している。これからすると、新たな埋葬施設導入にあって、前述する５世紀の中央埋葬思考を忠実に踏襲しているようである。なお、初期横穴式石室として最大規模の全長16.37m、羨道長12.0mを測る群馬県の王山古墳（註33）は正にこの例である。

方位に関する資料としては、長沖２７号墳、同２８号墳がある。長沖２７号墳は小前田古墳群１号石棺に類似し、長沖２８号墳は偏長な横穴式石室で前者に隣接する。２７号の土坑の大きさは２８号の玄室と同規模で、かつ石室方位がほぼ一致する。通常の横穴式石室は南に開口するのが一般的である、前代の墓制である竪穴式石室に規定された横穴式石室とすることができる。西に開口（N－77°－E）するものとして広木大町１５号墳がある。梱石を参考にすれば玄室長2.09mで奥壁隅が通常と異なり、矩形をとらず丸味を帯び、これが生野山１４号墳の竪穴式石室に近似する。横穴式石室としては使用石材も小振りで、この点も前者と共通している。

これらとともに、羨道を南北にしながら、玄室が東西方位に設置するのが「L」字型石室であり、十二ヶ谷戸１５号墳、黒田４号墳や群馬県の権現山２号墳（註34）である。同県の「T」字型石室である上陽村２４号墳（註35）も、同じ発想のもとに採用された横穴式石室といえる。

年代を知る手掛かりとしては、北塚原７号墳がある。ＭＴ15の須恵器２点が完形で出土し、高坏

は在地産的胎土であるが、瑞は極めて焼成もよく造りがシャープである。前述のように該期の年代は6世紀第1四半期とすることができる。北塚原2号墳の土師器坏は内面に暗文がみられ、5世紀後半から出現する外来系のものであるが、器高がやや低くなっておりＴＫ47の末からＭＴ15の時期に伴出するものと考えてよい。よって、児玉地域は早ければ、6世紀初頭には横穴式石室が出現していた可能性が十分ある。

＊土器副葬形態と他界観（図3）　横穴式石室には大量の須恵器が供献されるのが一般的である。なるほど、畿内的石室とされる簗瀬二子塚古墳（註36）では確かにこれが見られる。しかし、これ以外の初期横穴式石室にあっては必ずしも多くはなく、むしろ稀である。これにヒントを与えてくれるのが、北塚原2号墳と小前田9号墳である。北塚原2号墳の玄室棺床直下から、正位で前述の土師器坏が出土している。小前田9号墳からは、羨道床に埋められるように、ＭＴ15の須恵器を模倣した土師器瑞4点が検出されている。死者の冥界での供物を捧げるのであれば、北塚原7号墳のように高坏や瑞を玄室に据え置き供えるわけである。北塚原2号墳の段階では、石室構築時の儀礼用として、小前田9号墳では、須恵器を石室内に副葬することは知っていたが、これを模倣したとはいえ、供物を盛る行為は表現されていない。北塚原7号墳にいたりここに初めて、玄室内空間が意味する、本来の横穴式石室の機能と他界観を理解できたものと推定される。これら3者の変移は土器の年代が示すように、初期的な短期間に起った現象であろうが、その属する集団が旧墓制にいかに拘らざるを得なかったかの問題であり、これに政治的関係が加われば、より複雑な導入現象が現れるはずである。前方後円墳を含め、比企や北埼玉郡域が導入が遅れるのは、この辺に原因がありそうである。

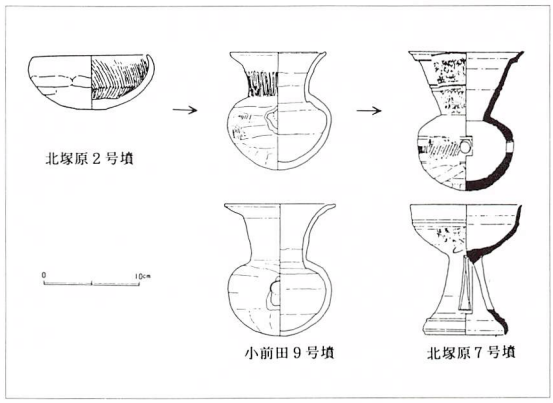
＊初期横穴式石室導入の意味　土器副葬形態から横穴式石室への須恵器の大量供献は、冥界における死者の生活に供するものであり、ここに供物を盛り付け、石室空間内の生活を想定する死生観は、新たな他界観として導入される。しかし、この際、児玉・大里郡域と比企・北埼玉郡域ではその導入期に四半世紀以上の差があり、後者には遅く出現する。前方後円墳は、比企では初現が長塚古墳で、北埼玉では将軍山古墳であり、後者は6世紀第3四半期のことである。

児玉・大里郡域は、5世紀代には前方後円墳はみられず、これに変わり大型円墳が構築されたことで知られている。比企・北埼玉郡域は4世紀代の諏訪山古墳（註37）に始まり5世紀には、雷電山古墳（註38）、野本将軍塚古墳（註39）、稲荷山古墳の3基は該期武蔵の最大規模を誇り、いわゆる政権中枢を担う地域といえる。そして、ここは旧く吉ヶ谷文化圏の中心を成し、古墳時代には先ず前方後方墳が、続いて逸早く前方後円墳が出現し、地域政権が早くから確立する地である。集団の紐帯的機能を果たし、その記念物としての古墳造営にあっては、その儀礼を最も厳格に執り行わなくてはならない。血統・出自が重視される社会にあって、その伝統的葬法やこれにかかわる厳粛な儀礼が遂行されることは、これに参加した配下集団の敬意の念を増幅し、次期首長としての立場を保証するものである。これによれば、当然ここで執り行なわれる埋葬儀礼は伝統を厳守した保守的なものにならざるをえない。将軍山古墳（前方後円墳）の横穴式石室の年代と北塚原7号墳（円墳）との導入期差の歴史的要因はここに存在するものと考えられる。ちなみに、6世紀初頭とされる東国初出の、畿内型石室を持つ簗瀬二子塚古墳は、東山道沿の要衝に突如として現れ、次代に継

承しない、極めて政治性の色濃い前方後円墳とされている。

これらに関わる事象として、課題の一つである横穴式石室導入期の将軍山古墳に触れてみたい。

前述したように、将軍山古墳は中堤帯造出し、多条凸帯埴輪、その規模から稲荷山古墳以来の本古墳群の宗主の墓として理解できる。しかし、平面形態はともかく、主軸に関しては稲荷山、二子山、鉄砲山古墳と異なりやや西に振っている。このことは、宗主の墓でありながら、この段階で横穴式石室を採用し、石室の南開口を保つため、伝統的主軸を西に振らざるを得なかったものと考える。しかし、宗主の階層差を保つため、セカンダリークラスの他の古墳程までは、その主軸を振り切れなかったものと考える。中段に石室を開口させるのも後円部中央に奥壁を設置するためであり、加えて、伝統的竪穴の埋葬位置である墳丘上位に置くための葬法とも言える。



第３図　石室内出土土器の変遷

いずれにしろ、将軍山古墳の石室の位置と墳丘の方位は、首長（宗主）伝来の伝統的保守的葬法と新来の葬法との融合形態である。この時点では、いかに旧葬法を遵守しこれを執行するかが、埼玉政権の首長には求められ、このことが配下の集団の支持を得る要因になったものと推察される。

＊無袖（短冊）型石室の出現と系譜　偏長短冊型石室は、東山道の岐阜、伊那谷、群馬、北武蔵に分布する特異な形態で、畿内には存在しない。この構造は簡単で楣石、玄門柱など設置せずせいぜい玄室を区切る梱石程度である。その出自を生野山１４号墳の竪穴式石室と初期横穴式石室の玄室とを比較し考えたが、石室構造に飛躍が大きく、現在確認されている資料からは系譜は追えない。偏長な玄室形態としては、竪穴系横口式石室として九州に勝浦１２号墳等（註40）があるが、基本的には竪穴系であり玄室形態の類似のみでこの系譜は追えない。しかし、生野山将軍塚古墳の石室は、やや幅広い特異なものであり、この古墳の半島的要素を加味すれば、必ずしもこの古墳からの系譜という意味ではなく、九州や畿内と同様な次元で当短冊型石室が出現しても不思議ではない。ちなみに、５世紀後半の雄略朝以降、毛野政権を含め半島との関係は頻繁であったはずであり、カマドや土器、古墳の副葬品からもこのことは明らかである。横穴式石室導入期以前の遺構、遺物から見た両地域の深い関係から、当然北武蔵北部もこれに加わった可能性は十分ある。半島の石室形態を導入するに当たり、彼等にとって重要だったことは、先に述べた伝統的在地墓制との融合であり、この中央埋葬思想を厳守したため偏長短冊型石室を生み出すことになったものと推察される。

＊派生する問題　比企・北埼玉郡域の古墳が保有する伝統的保守的な要因を、首長墓の変遷から述べてきた。さて、地域史的視点に立脚し、北武蔵の首長墓の変遷を振り返れば、稲荷山古墳以前の５世紀の比企には、武蔵における最大首長墓が少くとも２基存在し、その一つの野本将軍塚古墳においては、南北主軸という意味で埼玉古墳群と一致する。さらに、雷電山古墳にあっては、埼玉古墳群から有視界の距離に立地する。比企における５世紀後半以前の首長墓の存在と、さらに将軍山古墳の二つの主体部の在り方は、比企地域の長塚、秋葉塚、野原古墳と共通した葬制を有してお

り、かつ、横穴式石室の導入期もほぼ一致し、ここに両地域の深い関係が窺える。これらの諸事象から、稲荷山古墳以前の北武蔵の首長墓の変遷と系譜は、比企地域とすることができ、6世紀以降の墓制の在り方にも極めて多くの共通性が看取される。これらを重視すれば、稲荷山古墳が突如として出現したとする認識も氷解し、礫槨の被葬者論も一変する。本論から導き出された両地域の共通性を再確認することは、比企地域を加味した埼玉政権成立論に及ぶものと考えられる。

しかし、現状では未解決の課題も多く存在する。論旨に沿い今後取り組んでいきたい。加えて、児玉町秋山諏訪山古墳（註41）については、筆者自身、埴輪を持たない該期前方後円墳の理解が未消化である。児玉郡域の前方後円墳における横穴式石室採用時期の評価についても、改めて稿を草したい。

註1　岩崎卓也『古墳の時代』　教育社　1990
註2　斎藤忠他『埼玉稲荷山古墳』　埼玉県教育委員会　1980
註3　塩野博他『とやま古墳』　埼玉県教育委員会　1967
註4　増田逸朗「埼玉政権の法量的分析」『埼玉考古学論集』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1991
註5～註9　『鉄砲山古墳』他　埼玉古墳群発掘調査報告書　第2集～第8集　1985～1992
　　岡本健一「埼玉将軍山古墳の横穴式石室について」『調査研究報告第7号』埼玉県立さきたま資料館　1994
註10　菅谷浩之他「児玉町・美里町生野山古墳群発掘調査概要」『第6回遺跡発掘報告会発表要旨』　1973
註11・12　菅谷浩之他『長沖古墳群』児玉町文化財調査報告書　第1集　1980
註13～15　増田逸朗「北塚原古墳群発掘調査概要」『第4回遺跡発掘報告会発表要旨』　1971
註16　菅谷浩之他『青柳古墳群発掘調査報告書』　埼玉県遺跡調査会報告　第19集　1973
註17　小渕良樹他『広木大町古墳群』埼玉県遺跡調査会報告　第40集　1980
註18～20　瀧瀬芳之『小前田古墳群』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第68集　1987
註21　塩野博他『黒田古墳群』　黒田古墳群発掘調査会　1975
註22・23　金井塚良一他『諏訪山古墳群』　考古学資料刊行会　1970
註24　金井塚良一他『三千塚古墳群発掘調査－中間報告－』　三千塚古墳群調査会　1962
註25　亀井正道「踊る埴輪出土の古墳とその遺物」『ミュージアム』310号　1978
註26　斎藤国夫他『酒巻古墳群』　行田市文化財調査報告書　第18集　1987
註27　斎藤国夫『大日種子板石塔婆および古墳の調査』　行田市文化財調査報告書　第4集　1978
註28　柳田敏司「埼玉県児玉郡生野山将軍塚古墳発掘調査概報」『上代文化』第34輯　1964
註29　小久保徹他『東谷・前山2号墳・古川端』　埼玉県遺跡発掘調査報告書　第23集　1978
註30　註4と同じ
註31　右島和夫「群馬県における初期横穴式石室」『古文化談叢』　第12集　1983
註32　土生田純之『日本横穴式石室の系譜』　学生社　1991
註33　中村富夫「王山古墳」『群馬総社古墳群』　観光資源保護財団　1977
註34　横沢克明「権現山2号古墳」群馬県史『資料編3』　1981
註35　松島栄治他『広瀬団地古墳群発掘調査報告』　前橋市文化財報告書　第1集　1970
註36　尾崎喜左雄　「簗瀬二子塚」群馬県史『資料編3』　1981
註37　金井塚良一「比企地方の前方後円墳」『埼玉県立歴史資料館研究紀要』第1号　1979
註38　増田逸朗他『埼玉県古式古墳調査報告書』埼玉県県史編さん室　1986
註39　註37と同じ
註40　柳沢一男「竪穴系横口式石室再考－初期横穴式室の系譜－」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』　1982
註41　坂本和俊他『秋山古墳群』　児玉町史資料調査報告　古代　第2集　1990